2018年9月29日（於：対照言語行動学研究会（青山学院大学））

形容詞の機能

―連用形の副詞的用法の観点から―

秋元　美晴

本発表の目的は、現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ)の「新聞」「雑誌」「書籍」「白書」「知恵袋」「ブログ」のコアデータを用い、連用形で使われる頻度の高い形容詞「大きい」「深い」「強い」をコロケーション(collocation)の観点から、その意味・機能を考察することである。

なお、コロケーションにはさまざまな定義があるが、ここでは、Crystal (2008: 86) の“the habitual co-occurrence of individual lexical items”（個々の語彙項目の習慣的な共起関係）を採用する。

上述した形容詞連用形の副詞的用法とは、主に動詞述語を修飾する用法であるが、この機能は副詞の主たる働きである。つまり、形容詞のこの用法は副詞のそれと重なることになる（cf.『日本語文法事典』（2014：186）。次に「大きく」の例を見てみよう。

1. キャラクターや設定はもはや大きく変わりようがない。
2. 選挙結果は、各自治体のあり方にも大きく影響しそうだ。
3. ・・・再び原子力への信頼が大きく揺らいだことは間違いない。

「大きく」は「大きい」の連用形の副詞的用法であるが、本来の形容詞の意味「容積・体積などが大である」ことに加えて、多分に強調の意味が含まれている。興味深いことは、「大きく」は形容詞の意味を持ちながら、強調の意味を同時に発達させているということである。そしてこれらのコロケーションはこの形容詞の意味を背後に持ちながら、強調用法（話者の気持ちが強く投影されている主観的表現）も発達させたということである。ここでは、Traugott（1995）の提唱している

propositional――――――――――――――――→expressive(subjective)

（命題的）　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（感情表出的（主観的））

を援用する。なお、この強調用法はさらに進むと、稀薄化し、「ひどく」「すごく」のように形容詞の意味をそれほど反映せず、その結果、強調用法のみが一人歩きすることとなり、コロケーションの範囲は広がることになる。なぜなら、稀薄化することにより、文字通りの意味が失われ、文法的機能が強まることになるからである。

　本発表はこれらの共時的変化の過程をデータに基づいて検証する。

参考文献

仁田義雄・他（編）（2014）『日本語文法事典』大修館書店

Crystal, David (2008) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Oxford: Blackwell Publishing.

Traugott, Elizabeth C. (1995) “Subjectification in grammaticalisation.” *Subjectivity and Subjectivisation,* ed. by Dieter Stein and Susan Wright, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.